

安盛 壽一氏 （株式会社大林組常務取締役）

●世界のビビッドな情報に敏感な生涯学習を

—— 現在、老若男女を問わず生涯学習ということが言われていますが、こうしたことについて基本的な考え方をお聞かせください。

安盛 私自身は余り勉強しないほうでして、本もそう多読のほうではありません。現役の間はできるだけポカンとしてテレビを見ることにしています。

—— 学習といっても堅苦しく考えるだけのものではなくて、もっと広い視野で、楽しみながらいろんなことを吸収するのも学習といえると思いますが。

安盛 やっぱりね、日本という国がどうあるべきか、私などは常に気にかかることなんです。リクルート事件だとか、国内のいろんな事件が次々起こっています。それから今度は米国との摩擦があります。その摩擦のいちばん大きなインパクトを持つのが自動車産業だと思います。確かに自動車は現在では欠かすことのできないものだけでも、とにかくむやみやたらと自動車を作る一方です。どんどん車を作っておいて、もう道路いっぱいになっていますな。それで全然それを規制しない。それで不法駐車だっていったってもうしょうがないじゃないかと思います。なぜそのようなことに世の中がなっていったのかということを、いつも非常に考えますね。リクルートの扱い方でも、納得できないし、もうこの頃のマスコミの問題の取り上げ方というのは、どれもこれも納得しにくい取り上げ方なんだなあ。

—— 基本的な議論をどうするかということを踏まえずに、雰囲気だけに流れてしまうと難しくなってしまいますね。

安盛 そう。また一方では、今、東欧・西欧が非常に大きな、革命的な動きをしていますよね。それに対するアメリカだとか、ヨーロッパ各国の反応というものの、きわめて政治的な発言をし、その政治的行動に出ています。ところが、日本は何となくやっぱり経済の延長のような感じがあります。いわゆる地球環境汚染の問題にしたって、日本の国がこれから世界の中でどういう役割を担っていかなくてはいけないのか、というようなことについてとか、そのようなことの考え方の根本になるようなことをもう少し我々が勉強するチャンス、有識者の意見とか、そんなものがいちばん大事なんじゃないかなと思います。日本の進路は今まで非常にうまくやってきたけれども、これからの自分の子供だとか孫の時代の日本のあるべき姿を考えなくてはいけない。そういうわけですから日本の、世界における役割というようなものを、みんなが正しく理解できる、認識をもてる、それだけでもそういう方向にもっていかなくてはいけないと思うんですけどね。これはやはり、自分の子供や孫の時代も豊かな日本というようなものに

作っていくためにはぜひとも必要だと思います。だから、生涯教育っていうのは、こうした考え方の延長線上で議論し、認識を深めていくことが大切というふうにはくは思っておるんですがね。

●反応はまだにぶい放送大学構想

—— そうした根本的なものの勉強も大事だとは思いますが、実際に主婦や社会人の方が学ぶ時間は少ないけれども、勉強したいと思ってらっしゃる部分はかなりあると思いますが。

安盛 ありますな。確かに朝日カルチャーなんていうのは、ずいぶん流行っていますね。みなさん非常に知識欲がありますね。

—— そういう社会教育的なことをしている機関や、自治体や、企業などでも社員教育などにしてもそういうものに時間を割いたりしているところもあると伺っていますが、具体的な動きについてはどうお考えですか。

安盛 そうですね。確かに最近企業もただ働け働けだけではやはりダメだということで、幹部教育、あるいは中堅社員教育というような各階層ごとにできるだけ勉強の機会を与えようと、いろんな研修や講演会など、いろいろなものがありますから、そういうものをできるだけ、吸収しやすいような方向で企業は考えていますね。我々もやはり、できるだけそういうようなチャンスを活かし、時間を割いて、そういう勉強はしたいと思っています。

—— 週休2日制など、自由時間の増加なども関係しているのでしょうか。

安盛 それは確かにあるでしょうね。やはり労働時間を短縮して後は余暇。馬鹿騒ぎするだけのものではないですからね、余暇っていうのは。それで、皆さんそんなに勉強するようになったのではないのでしょうか。

—— 放送大学のような放送メディアを使った教育を、全国化することについて、次のステップとして関西地区でも進めていこうとしているのですが、放送大学についてはどの程度ご存知でしたか。

安盛 放送大学についての構想を読ませてもらいましたが、今のところこの件についてはあまり大きな関心を寄せていません。

●関西の情報発信力はまだ小さい

—— 若い人から年輩の人まで、無試験で入ってもらって勉強して、全課を取る人は卒業まで

あるわけですが、各課を取って勉強する人も3分の1ぐらいはいらっしゃると思いますが、そういう形でやって、関西でもやっていこうと考えているんですが。

安盛 関西は情報がすごく少ない町なんですね。東京の情報に比べればケタ違いに少ない。やはり、関西も情報発信というような機能をこれから持っていけないといけない。そうすると自然にそういう方向へ皆さん動いていくと思うんです。ですから今度の新空港なんかは、情報発信という意味からいえば、非常に大きな機能を関西に与えると思います。関西だけをとれば、新空港というものが、相当大きなインパクトになっていくと思いますからね。それに、学研都市とかもありますし。これから正規の大学ではなくて、放送大学にしる何にしる知識の吸収のためのチャンスをやはり、みんなが、若い者もお年寄りも増やしていこうという動きにつながっていくと思いますね。

—— その辺、情報発信量の少なさというものが、今後は増えていくだろうということと、放送大学自体を関西に位置づけるときには、どういう位置づけ方をするのが一番いいとお考えですか？

安盛 関東の放送大学というのは、どうなんですか、聴きたい人が勝手に聴けばいいということなんですか。

—— いえ、正式に入学するためには、登録して、一応放送大学用のアンテナを付けて、単位を取ってというふうに大学に近い格好でやっていって、4年で所定の単位を取れば卒業という形になるんです。それがふつうは大学に行って教育を受けて単位をもらうんですけど、それを家でかなりのことができる。卒業には最小限の面接授業は必要です。授業の内容としてはむしろ今までの大学と同じレベルのことをやるわけなんです。それを放送メディアに組み込んで、主婦の人でも社会人の人でも受講できる形で高等教育を行う。卒業でも1回卒業した人がまた入って勉強するというように何度でも繰り返して興味のあることを深めるなり広めるなりできるシステムになっているんです。

安盛 それは相当数の人がそれに参加はするとは思いますがね。

—— 関西地区の方が勉強するのなら、どういうテーマですか、どういうカリキュラムがいいとお考えですか。関西の人々に提供する情報なども関西という特徴があるのかいないのかということですが。

安盛 これは東京では相当な成果を上げているのですか。

—— まだ今年一期の卒業生を出したばかりなんですが、その卒業生がこの写真の人なのですけども。550人ほどが卒業しているわけです。

安盛 この写真の人たちですか。お年寄りもいますね。もう60歳ぐらいの方もいますね。

—— ここに年齢構成がありますが。

安盛 40代が一番多いようですね。それから50代や60代の方も。

—— 学歴でいいますと、高校までやっていて何かの都合で中断していたということを、こういうふうな勉強に繋いでいらっしゃる方もかなりいらっしゃるのではないかと思いますけれども。

安盛 やはり高校卒の方が一番多いのですか。

—— そうですね。現状の卒業生ですと。やはり分野なり、興味があってという格好なんでしょうけど。

安盛 勉強の好きな人が多いからな。男女の比率はどうなっていますか。

—— 女性が割りと多いですね。ですから主婦の方は、場所的に大学に通うことはできないけれども、時間的には余裕がとれる方が多いということもあるでしょうね。

安盛 そうですね。ただそういう人たちがどのくらいニーズをもっているか、僕にはわからないからなあ。しかしカルチャーセンターなんていうのはやはりかなり流行ってる。女性は皆さん時間が余ってますからね。

—— 知的好奇心といいますか、勉強しようという意欲は男性も持っているけれども、時間がないという人が結構多いと思いますね。関西という土地柄と勉強というものについての特徴とかは何かお考えですか。実学主義だとか、大阪では「儲かりまっか」主義の情報に流れがちだという意見も一部ではありますが、会話では出てきても実際は違うという面もあると思いますけれども。

安盛 実践主義とよくいわれますが、実際はそんなに違わないと思います。確かに幅広く攻めていくというよりも単刀直入にいく傾向ではありますな。お金儲けならお金儲け、という風に1本にやっていくような、多少そういう傾向はありますけどね。

●個性の違った大阪、京都、神戸

—— そういう学習に対する考え方についてはどのような感じをお持ちですか、関西地区で。

安盛 関東と比較すると、関東は、東京の世相を反映してますし、政治的にもあるいは情報文化の面でも反応が早いです。それに対して関西は割りにのんびりしています。しかし案外じつくりと勉強している人も多いように思うんですがね。ただ、大阪という街の反応が関東と比べればのんびりしていますから、それなりの社会の変化に対する反応なんていうのは、のんびりしていると思います。

—— 大阪だけでなく、関西全体、たとえば神戸とか京都とかとの違いは、どのように考えておられますか。

安盛 大阪と神戸と京都ってというのは本当に違いますね。

—— その違いが良く出る面とソッポを向く面と両方ありますか。協力してやるというのは、もちろんいろんな立場によって状況は違いますが。

安盛 あまりその辺の違いで、お互いに排除し合うというのはないと思います。かえって関東のほうが非常に排除的です。非常に自己主張が激しいから、会議をしても相当先鋭なというか激烈な論争をやるけれども、関西はあまりそういうことはしないですからね。あまり極端なことは関西の人は言わないから。ぼくの会社だけじゃないでしょう。

—— たとえば大学は中心からずっと外へ出てしまってあまり都心部になくなってきてますね。そういう勉強する場なり、若い人が出入りする場所が大阪から外に出てしまうということについては、何か影響とかあるんでしょうか。

安盛 私はもともと京都なんですけど、京都っていうのは学生の街で、京都そのものが勉強の街だというのがあったんですけど、京都もだいたい崩れてきてますね。同志社も出てますし、その辺に対して抵抗はあるけれども、あれだけ学園が大きくなってくれば、もう敷地が少ないからやむを得ないと思います。大阪だってそんなんで、大阪市の真ん中に大学を置いておくわけにはいかないから、どうしても拡散していくでしょうね。

—— 東京なんかではまだ残っている大学というのは、キャンパスは狭いですけど、上に伸ばしたりして、やっているようですね。

安盛 しかし不思議なことに京都大学、大阪大学、神戸大学それぞれ個性が違いますな。

—— そうした違いを競い合うというのがプラスに働けば、関西の情報発信機能を高めて関西から情報を出していくことが可能なように思えるんですけど。

安盛 もっと個性化があった方がいいように思うんですね。

●一般大学と違うメニューの工夫を

—— そういうものをたとえば放送大学で取り入れるとか、それらを融合させて議論するとかを、放送メディアでやればおもしろいようにも思うんですけど。

安盛 これからはできるだけメディアを使うということですから、メディアがもっともっと高度化して、もっと素晴らしいものにしてやろう、僕らが思っているメディアよりもっと進んだものにしてやろうと、そういう方向で皆さんがんばってるというのも事実ですからね。放送大学に限らず、ほかの大学だってそういうメディアをもっと活かした教育というのが可能だと思います。皆さんそういう意欲は持ってらっしゃいますからね。ちょっと残念ながら放送大学というものの、意見とか判断とかは、あまり持ち合わせていないもので。テクニックとしては、やはり各大学も非常に関心があると思うが、大学、産業界、共にもっとコンピュータライゼーション、映像をもっと使うとか、今真剣に考えていますから。放送大学であろうと各大学であろうと、あるいは企業であろうと、もっと映像化して、メディアをもっと使うんだということで、効果を上げようということ、これはもう間違いないですね。

—— 放送大学の場合、放送自体は一方向でしか流せないんですけれども、実際にはそれを双方向にするためにはどうするかということで、学習センターで面接授業をやったりということなんですけど、それをコンピューターを使った通信などがもっと発達してくれば、それ自体も双方向でできて、先生への質問をコンピューターに向かって打てば、先生から答が返ってきたり、それについての意見が返ってくるなりということは、今の技術では可能ですね。

安盛 それは可能ですね。

—— そうなったときに、メディアとしては発達するけれども、じゃあ何をそのメディアでやるかというときに、実際にまず流行ったのはゲームで、おもしろくてやってというのから、株式とか、ホームバンキングみたいなこともできてきていますよね。そういうメディアのありようと放送大学の関係はどうなんでしょうか。

安盛 やはりどういうメニューを取り揃えるかということになるんじゃないかと思うんです。大学でやっていることを放送大学でやっても、一緒だということになればね、あまり皆さんそうは寄らないんじゃないんですか。やはりどんなメニューがあるかということ、各大学でやってるメニューでないメニュー、さっき言ったような、根本に関わる日本のあるべき問題というようなこともありますし、そのほかにも、大学では取り上げていない、日本の教育のありようと違うものがあればおもしろいですね。カルチャーセンターなんていうのはまさしくそれなんですよね。だからそういう新機軸で、どういうメニューを取り揃えるか、それによってこの方

がおもしろい、大学なんか行かんでもとなるかと思います。たとえばこの目の前に料理学校があるでしょう。この頃の若者なんていうのはもうそんな学校おもしろくないから料理学校行ってるかもしれない。全然その、我々の育った時代とは違った志向性を持っていますからね。そういう意外性をはらんだ方向を考えておかねばならないと思います。